

## 令和元年 スマート SME(中小企業)研究会(第4回) 議事要旨

日時: 令和元年6月26日(水)14:00~16:00

場所: 経済産業省本館17階国際会議室

### 議題

1. 開催挨拶、趣旨説明
2. 出席者からのプレゼンテーション
  - ① パロアルトインサイト 石角様からのご説明
  - ② 株式会社ABEJA(アベジャ) 菊池様からのご説明
  - ③ 株式会社EBILAB(エビラボ) 常磐木様からのご説明
  - ④ 株式会社KOSKA(コスカ) 曾根様からのご説明
  - ⑤ 株式会社eftax(エフタックス) 中井様からのご説明
3. 自由討議

### 議事概要

#### 1. 出席者からのプレゼンテーション

##### (1) パロアルトインサイト 石角様からのご説明

米国企業におけるAI導入率40%と比べて、日本企業のAI導入率は2.9%と相当低い。これまでの導入実績をみても中小企業こそAIによって解決できる課題が多く、積極的にAIを導入すべき。現場目線の局所的課題解決のためのAI導入についても議論すべきであり、ビックデータありきで語るのではなく、スモールデータ、スモールスタートで取り組むことが重要。また、ビジネスデザインからAI実装までの概念設計し、中小企業とAIをつなげる人材(=AIビジネスデザイナー)の育成が必要。

##### (2) 株式会社ABEJA(アベジャ) 菊池様からのご説明

AIの活用を進めるには、課題設定、実装、効果検証のプロセスが必要。プロジェクトのポイントはまずは良質なデータを確保するところであり、トライアンドエラーを通じて徐々にAIの精度を向上させる。中小企業の現状を見ると、AI導入の初期段階で必要となる、課題設定や事業性の検証を自前でできるところが少なく、サポートが必要。

##### (3) 株式会社EBILAB(エビラボ) 常磐木様からのご説明

AIなどのテクノロジーを活用することで、顧客との接点の見える化や投資回収の根

拠をデータで明らかにできる。しかし従来型の POS はデータが囲い込まれているため、中小企業がデータ活用する際の障害となっている。

#### (4) 株式会社KOSKA(コスカ) 曾根様からのご説明

製造現場における原価を見える化するサービスを提供。ある程度の誤差を許容しつつも、現場で何が起きているかを経営者により分かり易く分析、解説できることで現場の改善に寄与。一方で、殆どの中小企業は現場データの取得ができていないのが現状。経営者がやりたいことに対して、何が必要で何ができるのか、何から始めるべきかを中小企業の現場に入り込んで支援できる人の教育を議論すべき。

#### (5) 株式会社eftax(エフタックス) 中井様からのご説明

地域の中小企業は生産性が低く、自身もそのことに気付いていない。かといって学び直しにより現状を変えるように仕向けることも難しい。中小企業が AI やデータを活用し生産性を向上するには、誰にも見えていない課題を見つけて、誰も見つけていない方法で解決する人材の育成が求められる。その際、1社で人的リソースを揃えるのは難しいため、国等が主導して、産学官一体で AI 活用を後押しする枠組みがあると良い。人材育成については、省庁横断的な取り組みを期待している。

## 2. 自由討議での出席者からのご発言

### (1) 河原様からのご発言

多くの利益を上げていて多忙な事業者でも IT 化が遅れている。経営者は管理会計と財務会計と一緒に考え始めているがうまく機能していない。IT 化のための業務プロセスの見直しは経営判断が必要であり、生産性が低い部門については撤退することを判断するタイミングは難しく、情報の収集は重要である。得られた情報を活用できる為にも経営層に対する IT リテラシー向上のための教育が必要である。IT 化が進むと職を得る人と失業する人の二極化が進むが、失業する人に対して政府としてドイツで組合が実施している職業訓練のような対策を望む、若い人材への教育だけでなく、広い年齢層に対する教育も必要である。

### (2) 常盤木様からのご発言

データドリブン経営に中小企業が移行できるかどうかことが重要ポイントであり、その実現手段が AI や IoT。地域の中小企業は、大資本会社と同じ方向で負け戦を挑むのではなく、自身が持つ強みを把握し、それに関する施策の効果測定を実現するための手段として AI や IoT を活用することが正しい生き残り戦略。施策に対するチェック

ポイントは業種・業態によって異なると思うが、そのチェックポイントを可視化し、地域の金融機関や行政機関と連携して支援する仕組みが望まれる。

(3) 曾根様からのご発言

AI 人材を育成したいのか IT 人材を育成したいのか、どのレベルの人材を育成するのか明確にすることが必要であり議論したい。AI に特化したエンジニアを育成したいのであれば、非常に整備された既にあるデータを基に教育するのが妥当。

(4) 石角様からのご発言

人材の線引きをするのであれば、データサイエンティストやマシンラーニングエンジニアのような学術人材なのか、あるいはビジネス課題解決に落とし込める人材なので、分業の線引きはできるだろうが、いずれの人材も増やす必要がある。

(5) 常盤木様からのご発言

人材の分類には、論文技術を読むリサーチャーと、それを社会実装する概念を考えるアーキテクトの2つがあり、さらにアーキテクトはプログラムやソフトウェアを作るアーキテクトと、ビジネスアーキテクトの2つに分けて議論することができる。

(6) 中井様からのご発言

これからの人材には、現場を観察あるいはヒアリングして課題を抽出し、どういうデータを収集し付加価値を生むか設計するところから学んで欲しいが、計算資源があるところでひたすらマシンを動かす人も必要であり、それぞれフェーズによって必要とされる人材は異なってくるため、チームビルディングが重要。

(7) 菊池様からのご発言

データサイエンティストと呼ばれる人材の範囲は広いものの、役割やレベルで分解できる。国はどの部分を推進したいのかをマトリックスにして定義づけて示すことができれば、人材を教える側もその定義を意識することができる。

(8) 常盤木様からのご発言

経営層と会話するのは、データサイエンティストではなくデータマーケッターであるべきである。

(9) 渡邊様からのご発言

データ活用的手段と目的を中小企業にとって分かり易く明確にしなければ議論が発散してしまう。特に手段として何をすればいいか、国がガイドラインやロードマップなど大きな枠組みを見せなければ、中小企業は何をやっていいかわからない。またその手段を実施するにはどうすればいいか、決定権を持つ経営者に分かり易く届けるため、現場の言葉をトランスレートする人材の育成も必要。

(10) 中山様からのご発言

AI 活用と IT 活用の議論に大きな違いはない。最近、副業 CTO が活性化してきている。中小企業の CTO の副業獲得を促進することで、AI に限らず全てのデジタルの軸で物事が一気に解決するのではないか。対象となる人材は、既に数多く存在している。その先で、AI プログラミングを書き、課題解決する人材も必要だと思うが、それは SME の文脈ではなく、別軸でやるべき。

(11) 石角様からのご発言

AI モデルばかり増えても現場へのシステムに落とし込めない。経営者にどう伝えるか、UI をデザインする IT 人材も当然必要となる。見える化をしないことには、中小企業の経営者には伝わらない。

(12) 曾根様からのご発言

中小企業の課題を解決する時には登場人物が多いが、人材育成が目的なのであれば全員が必要。重要なのは、その人材を細分化した上で育成すること。それぞれの役割を区分けした上で1チームを構成し、1プロジェクトにあたる。これを複数実施するのが理想。

(13) 佐々木様からのご発言

AI 導入を考えたときに、支援団体が AI 人材との橋渡し役になることが必要だと認

識している。中小企業診断士や、IT コーディネータと連携しながらサポートできると良い。